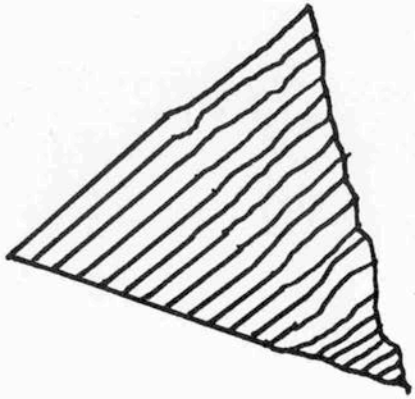
随想



カット／斎藤　智

●ポートピア'81テーマ館展示部門

「16ミリで」

斎藤　智

＜造形作家＞

テーマ館は現代の情報文化の先端をつっぱしっているビディオ・アートがメインになるのですが、私の仕事はといえば、片隅でカタカタと昔なじみの8ミリならぬ16ミリを使ったものです。与えられたテーマは「海と人間」です。塩屋の海辺の最上階のマンションに住んでいると、見える風景は海だけなので、このテーマは私にとって手近かすぎるせいか、一寸とまどってますが、まあまあまりこらずに素直にいってみるつもりです。

最近の私の作品は反映されたものを写真にとり、その写真を撮られたところに挿入するといったものが多いのです。例えば画廊の壁面に2m×4m程のアクリルプレートをぶらさげます。やや鏡面状になるわけですが、その前に立っている自分を含めた光景を写真にとるのです。その写真を1m×2m程の原寸大に伸ばし、その壁面とアクリルプレートの間にさし込むわけです。観客がその鏡面状の前に立った時に、観客の像が当然うつるのですが、挿入された私が写真を撮っている像の写真とダブルわけです。この方法を「海と人間」というテーマで16ミリにおきかえるのです。ただ写真と16ミリでは違ってくるわけで、光による映像体ですので、観客の像との重なりは出来ず両はしに並列にうつるだけですが…。

ところで、こんなことが一体どんな意味があるのかとお思いでしょうか…。かといってこれこれの理由によりますといった回答めいたものを用意するのもなにかと思いますが、でも一寸だけそのことにふれてみます。水たまり等に映った像は、鏡のように明確にあらわれはしないけれども、より自然な感じでなじんでみえます。アスファルトのへこみに溜った水に転倒されて映っている街路樹。ショウウィンドウに映っているあなたの歩いている姿。それらはさわやかな隙間であり、そして、やはり映

ギャラリーの壁画の作品「Untitled 78」

像のはじまりを含んでいるのです

さて、そういった映像達の時間と場を少しずらして、現時点とダブらせてみようという、ややマンガチックな試みなのですが、うまくいきますかどうか、それは…。

●100回目を迎えたサロンコンサート

日曜日の午後のひととき

藤沢　久美子
〈サロンコンサート協会事務局長〉

満員の聴衆をかきわけるようにして、演奏家が二人、ピアノに歩みよると一隅から拍手に誘われるように、室内がどよめいた。「皆さんサロンコンサートへようこそ、日曜日の午後のひとときを、私のヴァイオリンでくつろいで下されば幸いです」とヴァイオリンを小脇にかかえて挨拶した演奏家は、調弦を手早くすませると、二言三言ピアニストと打合せ、再び聴衆に向うと「ジプシー音楽の芸術性を高めた名曲で皆様もよく御存知のチゴイネルワイゼンを弾きます」と語りかけ、やがて演奏が始まった。

ピアノに誘われて力強くヴァイオリンの音色が室内に溢れるように響きわたると満座は静まり返り、人々は息をつめるように聞き入った。満員といっても人数は高高五十人位だろうか、四・五畳と六畳の境界のふすまを取り払った位の部屋に、小学生らしい子供達十五人位と大人が三十五人位だから。それでも超満員だ。ちっちゃな女の子が両ひざを抱えてヴァイオリニストを仰ぎ見ている。彼女の足はもう少しで演奏家とぶつかる程だ。ある人は目をつぶっていかにも気持ちよさそうに、ある人は弓と弦のあたりを注視し、ある人はピアノとヴァイオリンをめずらしそうに眺め様々な姿勢で聞きほれている。母親らしい人にもたれて気持ちよさそうに聞いている女の子、友達同士肩を寄せ合っている子供達、音楽は甘くまたせつなく、そしてリズミカルに流れていく。ダイナミックなところにくると思わず体をゆり動かす人もいる。音楽のあるところ皆人の心が一つに融け合っているようだ。

こうしたサロンコンサートが神戸ではじまって三年半、この十一月三日に百回記念コンサートが催された。数人の奉仕活動ではじまった市民運動は、コンサート会場を提供する家庭を中心に、その地にしっかりと根づきはじめたようだ。神戸、西宮、芦屋、大阪、京都、大津、岸和田、堺、奈良と近畿各地で合計二十五軒の会場提供家庭がある。ちょっと気取ってそれをサロンと呼んでいる。そしてその家の主をサロン主と称し、そのサロン主会議は、サロンコンサート運営の基本を形成している。聴衆はこの三年半でのべ四千人を超えた。サロン提供者も増えつつあり、聴衆もまた増加の一途をたどっている。

日本人にとって西洋の純音楽に親しむことはプラスにこそなれ、マイナスになることは決してないと信念をもった人達の三つの理想①真の芸術を身近に感じ、②真の芸術家を育成し、③真の芸術を媒体として地域社会の連帯感を深めたい（近所同士仲よく住みよく暮しましょう）は徐々にではあるが、達成されつつあると思う。

音楽は最高頂に達し、情熱的な音の奔流の後に終わった。人々は

スイスのユングフラウにて筆者

はっとしたように一瞬シンとしたそしてどよめきと歓声が一時にわき起こった。みんなニコニコしている。演奏家もにこやかに挨拶している。鳴りやまぬ拍手、拍手。

★12月のサロンコンサートのご案内
12月7日(日)PM2～淡路島・横山サロン
12月21日(日)PM2～北野町・佐本サロン
サロンコンサート協会事務局
神戸市長田区西山町4丁目4－18
☎(078)691－1985

まったく妙な取り合わせ

佐藤　晴美

〈大東美術研究所動務・漫画家〉

かけっぱなしのFM放送が「おやすみなさい」を言って沈黙した。急に部屋の中に夜が入ってくる。不安だ……。

あわててAM放送に。仕事がたまってくるとこういう生活を送るようになってしまう。なんだか悲しいなあ。今日も一日中、机にかじりついていた。

で、職業は?。こう問われた時私は返答に困ってしまう。職業とは生計を立てるために日常従事する仕事のことであるため、現在親のスネをかじりつづけている私は今やっている仕事を職業とは呼べないのではないのかと思うからだ

週に一度、陶芸教室の講師、他の日はマンガを描いているか、デザインの仕事をやっている。陶芸とマンガ?まったく妙な取り合わせだと自分でも思う。高校・大学と陶芸科を専攻していたので、陶芸家として生きる道を歩んでいたはずなのに、現在では、大学を出てから描き出したマンガの方が生活の中心になってしまっている。

8匹いる猫のうちの1匹"ピース"と動物好きな筆者

学生時代の友人にたまに合うと必ず「今、何やってるの?」という話題になる。「マンガ描いている」「へえ、私、少女○○とか月刊少女××など読んでるよ、何に載ってるの?」とくる。「少年誌」と言う、これで話はとぎれる。

一応女性である私が描いているのは、一応少年誌に載る作品である。一応と書いたのは自分ではあまり少年誌を意識して描いているのではないためだ。描きたい作品を描いたら少女誌に受け入れられなかった。私は女性なのに……まあ、私の作品の主人(?)公達は人間以外の動物ばかりで、それもオオカミやイヌワシやキツネ等、これではしかたがないと思う。私は動物が描きたいのだ。彼らの生きる姿を描きたいのだ。

マンガを描く紙、白い紙、白は果てしない可能性を秘めている。どんな色にでも染めることができる。どんな世界でも描ける。私の思い、私の詩がどれほどこの中にたくせるかな?今のところ白い紙を汚すに留まっているが、まあ、一度きりの人生だ。この先まだたくさんの時を重ねていく。だからまだまだ結論は出さないでおこう

あ……AMの放送が「おはようございます」を言いだした。冗談ではない、私はまだ眠ってはいないのに。そろそろ眠ろかな……。

'80
ORIENTAL HOTEL
THE CHRISTMAS

☆ショウ ゲスト

中村 晃子 & キングトーンズ

★演奏＝居上 博とファインメイツ

12月20日(土)

☆ クリスマス ディナー ショウ

★4:30 PM

●お1人さま 25,000円（豪華抽せん会・税・サービス料込）

（勝手ながらお子様連はご遠慮下さいませ。）

☆ クリスマス グランドパーティ

★6:30 PM

●お1人さま 20,000円（フルコースディナー・ショウ・豪華抽せん会・税・サービス料込）

●ご予約・お問い合わせはお早や目に……

☎(078)331-8111（内線1250・1260）

オリエンタルホテル

〒650 神戸市中央区京町25番地

（万一出演者の病気又は事故等による代演はご了承ください。）

□ある集いその足あと

劇団神戸

夏目　俊二

〈劇団神戸主宰〉

昭和45年2月に生まれたわけだから、今年でまるまる10年。時の経つのがあまりに早いような、遅いような一種奇妙な感じがする。

出来た時のメンバーはたった2人、1人なら個人、2人なら団体という奇妙な論理で、最小の劇団というのを売り込んだら、NHKがテレビ取材にきたりしたのも今は思い出。なんとなく良き時代。

それでも旗挙げの今村昌平原作の「果てしなき欲望」には30人を超す仲間が集まって侃侃諤諤、意外な成功。つまりは劇団というしかつめらしい枠を取っ払って、公演ごとにその芝居に共感する仲間を結集しようというやり方。フリーといえばフリー、ノンシャランといえば全くその通りだが「芝居こそは世の鏡、これで映してみせるぞ王の心を」とハムレットの台辞通り、外様化し多相化していく時代に対応する構えは自在流に在りと観じていたわけ。勢い既成の作品の人真似を避け、オリジナル創造に熱がこもり、安水稔和「むかし海ミドリムシ」「紫式部なんか怖くない」田辺聖子「びっくりハウス」三枝和子「六つ目の首、それはお前だ」と初演作品が続く。あまりの多彩さの故に、裏返せばあまりのシッチャカメッチャカ故にどっちゃ向いているのかわけがわからんと蔭口やら表口やら叩かれたのもこの時期。

とはいえ、世界の現代戯曲にも眼を向けてグローバルに時の流れを摑むべく、マリオ・フラッティ「金曜日のベンチ」サルトル「トロイアの女たち」ドルスト「城壁の前での大いなる弾劾」ボウエン「トレヴァー」ファスビンダー「外人野郎」と英米仏独を股にかけて世界行脚。地域のオリジナル戯曲に世界の現代演劇、それにミュージカルへの挑戦を加えて3本の柱を支っかい棒にいわば悪戦苦闘の連続。背いっぱいに背のびして、兵庫県芸術祭、神戸市民演劇祭、神戸文化ホールグリーンステージなど数々の行事をこなしてふと気のつく10年目。

兵庫県芸術祭（'77.11）「新ハムレット」太宰治作
夏目俊二演出（左より）入川保則、夏目俊二、近衛真理

人去り人来りて、今は志を同じくする仲間が約30名。地方の時代に悪乗りするつもりなどさらさらないが、一つの点をやがて線に、さらには面にと、肩の力を抜きながら、しかし思いをこめてスタートしたコメディ・ド・フーゲツの連続公演。正しく街（ブールヴァール）の演劇として客足上々、評判上々、良いことづくめで既に7作目を迎え、おまけに神戸市文化賞という地元演劇界では全く初めてのライムライトに照らされて、世は望月の思い一汐だが、満ち欠けは世の習い、月の光にかくされた影の部分こそ正念場。今までの10年は踏んづけられても起きあがる楽天性が取り柄、これからの10年はプレッシャーに堪えながらの精神力が武器。如何に努力しても避けがたいマンネリ化を排し、次なるステップに飛躍させるものは何か。

念願のミラノ公演はじめ、姉妹各都市との演劇交流、世界の地方演劇の核としての神戸の位置づけなど、ターゲットは山積している。

劇団神戸はその第一歩を、今、踏み出している。

〈お問い合わせ〉
〒650 神戸市中央区江戸町101三共生興スカイビル ☎392－1664夏目俊二

□れんさいエッセイ／私のひろいもの〈24〉

へんな唄

竹中　郁〈文と絵〉

あたま　ハイカラ
顔おから
背なか　巡航船で　尻　ラッパ

こんな流行歌があちこちで歌われた。大正になりたての頃だったとおぼえている。さっそくと覚えたてのホヤホヤで、うちの台所に立ち働く女中さんたちをからかった。

ハイカラ髪というのは、前もうしろもふくらませ、天っぺんに余り髪を束ねて据えつけた形の髪テレビでみる黒柳徹子のかむっているかつらによく似ていた。髪の多い女なら、誰しもが自分で毎朝結べるものらしかった。

うしろから見ると、かぼちゃを頭にのせているようにも見えた。日本流のももわれ、丸まげ、しまだ、蝶々などという結髪を見慣れていた時代が過ぎて、ハイカラという束髪に大革命をしたので、男性側からはこんな唄の文句のようなひやかしがとんで出た。

おからというのは、豆腐のおからのことで、ハイカラのカラを受けて脚韻をふんだのにちがいない。

巡航船というのは、大阪の道頓堀、横堀、堂島川をはしっていた乗合船（ポンポン蒸汽とも云ったか）で、その形態がすっきりとしてないのが特長だった。市内電車が三銭くらいで、この巡航船は一銭か二銭くらいだった。

そんな唄のはやる以前に三浦環（たまき）が女だてらに自転車にのって、袂をひるがえして上野の音楽学校へ通ったときに、お下げ髪では長さが邪魔になる。それでハイカラ髪にたばねたのだとかと聞いた。

とにかく、新聞か雑誌かで知らされる以外はない時代だから、三浦環がどんな女性かもわからないうちにハイカラ頭の女だということに覚えこん

でいた。

旧姓は柴田環、のちに結婚してオペラの蝶々さんをうたうことでまあ世界のあちこちで名を知られた。

この唄をうたうと妙にこの環さんを思いうかべる。その理由はあまり美人ではなく、太った不恰好なからだつきであったせいだ。

尻ラッパと結んだのは、形がラッパなのではない。時たま発するふしぎな音の発生場所として、これまた、からかったのだ。

とにかく、この唄は、終始女性をからかうことに力点をおいて作詞されてある。今なら、どこからか抗議がでてくるにちがいない。宝塚の橋の手すりの上に、手のひらの上に女性がおどらされてるのを彫像化したら、世の一般の女性の怒りを買った。つい一年ほど前のはなしである。

わたしが覚えたてのホヤホヤで、うちの女中さんたちにうたってはやし立てた時も、

「ボン、いややわ、そんなこと歌うて、下品やおまへんか」とけんつくを食らった。

その頃、家のあちこちの普請に、大工や左官が出入していたが、その連中が仕事をしながら大声で「あたまハイカラ」をうたっても、女連は抗議をしなかった。からかわれて、却って快感をかんじていたのだろう。

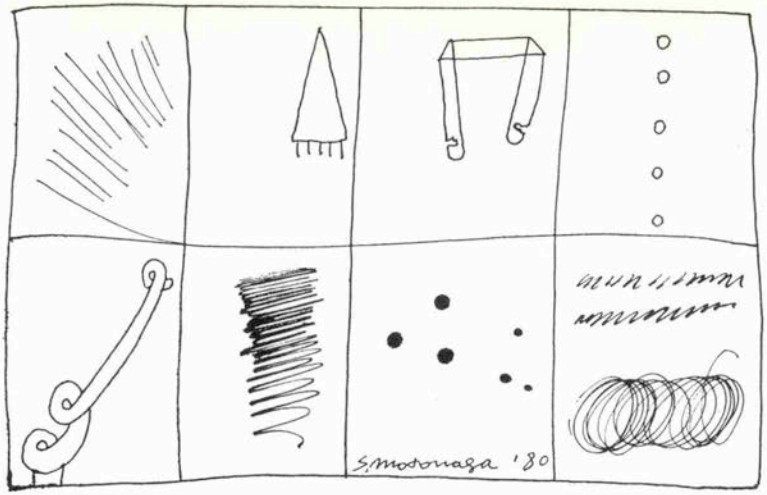
中でも、音やんという大工が腹かけのドンブリから怪しい絵本を出してみせて、ひらひらさせながら、「尻ラッパ」とうたい終ると、あちこちでくっくっと忍び笑いの声を立てる。子供のわたくし一人が怪訝な心で孤立した。

神戸歳時記●十二月

ジングル・ベルの三宮

三枝和子〈作家〉

絵／元永定正



どういうわけか、ジングル・ベルは三ノ宮界隈で鳴っているのが一番似つかわしい。それも、そごうの前あたりからと、阪急の山手側の商店街や飲屋街から聞こえて来るのが、もっとも所を得ているような気がする。十二月に入るのを待ちかねたように、気の早いときは十一月の終り頃からのときもあったが、とにかくこれが鳴り始めると、どことなく浮き浮きして、しかしそろそろ年の瀬だなと忙がしい思いにもとりつかれて、歩調がひとりでに早くなるのである。

ジングル・ベルは、やはり大都市で聞くのがよくて、いま私の住んでいる滝野町ではあまり出くわさないが、近隣の西脇市などへ出掛けて、商店街やスーパー・マーケットで鳴っていると、何とも佗しくてしかたがない。場末のサーカスのジンタを聞くときの、さむざむした思いに捉われて来るのである。

大都市がいいからと言っても、東京や京都で聞いて暮したときは、どうもぴったりしなかった。特に京都がいけなかった。河原町通りの三条から四条までのあいだのパチンコ屋でがなり立てられていた印象だけが強く残っている。

いまは東京で、おおむね新宿あたりでの機会が多いわけだが、いつも反射的に、三ノ宮のジングル・ベルを思い出してしまっている。私の単なる思いこみに過ぎないのだが、あれは神戸のハイカラさと野暮ったさが一つに溶けあった場所がふさわしい。だから北野町のあたりへ行ってしまうと駄目。須磨あたりでも逆の意味でサーカスのジンタになってしまう。

いろいろうるさく言うけれど、本当のところは、

私が最初にジングル・ベルが街に流れるのに出会ったのが三ノ宮ではなかったろうか。記憶がはっきりしないが、どうもそんなふうに思われて来る。

現在は、かなり下火になったが、一昔前までは、クリスマス・イブの一週間くらい前から、飲屋のクリスマス・パーティなるものがさかんで、酔っ払いのジングル・ベルをよく聞いたものだった。赤や緑や、金や銀のトンガリ帽子をかぶって、片手にクリスマス用の華やかな包み紙とリボンで飾ったお土産をぶら下げ、ジングル・ベル、ジングル・ベル、と怒鳴りながら小路の暗がりでゲロなんか吐いている。

でも、私は、そんな風景は好きだった。年末の風物詩の一つとして眺めていた。自分が呑んべえだから酒呑みに味方して言っているのかも知れないが、あの家庭のクリスマスという奴が大嫌いである。何とも偽善的でいけない。クリスチャンの人は別ですよ。お互いクリスチャンでも何でもないものが、クリスマスプレゼントしたり、クリスマスツリーを飾ったりする風潮だ。それを一概に悪く言っているわけではない。日本人て、そんなことが好きだから、どんどんやって、宗教とは別に生活として愉しんでも許されるだろうと。それだのに何故呑んべえだけ咎めるの、と、それがシャクなのだ。呑んべえのクリスマスに対しては厳しいが、家でクリスマスケーキ買ってローソク灯けて、クリスチャンでもないのに「聖しこの夜」歌ってお子様サービスするのが感心な、みたいな雰囲気がここ数年以上続いていて、それに酔っ払いのジングル・ベルが少しずつ圧され気味なのが残念なのである。キリスト教との関わりから言うと、どちらも変なので、いや、私の考えではお子様パーティの方が偽善的なので、何とも釈然としない。

ジングル・ベルでショックだったのは、阪神の地下道から国鉄三ノ宮駅へ通じる階段をあがったところの、あの扇形の場所で傷痍軍人が演奏しているのに出会ったときだ。

あの姿を見かけなくなってから何年になるだろう。「異国の丘」や「戦友」をアコーディオンで弾いていて、その側を通るときは、いつも暗い思いに捉えられた。あれはニセモノだ、などという人もあったが、私はニセモノでもホンモノでもどっちでもいいと思っていた。傷痍軍人という事実は本当なのだから、戦争の傷を忘れかけている私たちに、まざまざとした形でそれを見せつけてくれることは意味がある、と思っていた。

その傷痍軍人の演奏する曲に、時折、「ミカンの花が——」などが混るようになり、あれれ、ちょっと違うんじゃない？　と首を傾げているうちに、ある日、突然、ジングル・ベルを聞いてしまったのだ。

それは、あのとき一回きりのものだったかも知れない。傷痍軍人も、あまり巷でジングル・ベルが鳴り響くものだから、ふと調子を合わせてみただけのことだったかも知れない。しかし私は何とも異様な気持になった。何も彼もゴジャゴジャじゃない、いったいどうなっているの？　思わず、そう叫び出したくなった。ジングル・ベルにまつわる奇妙な思い出である。

（了）

□トランペット片手にブラジル一人歩き　〈3〉

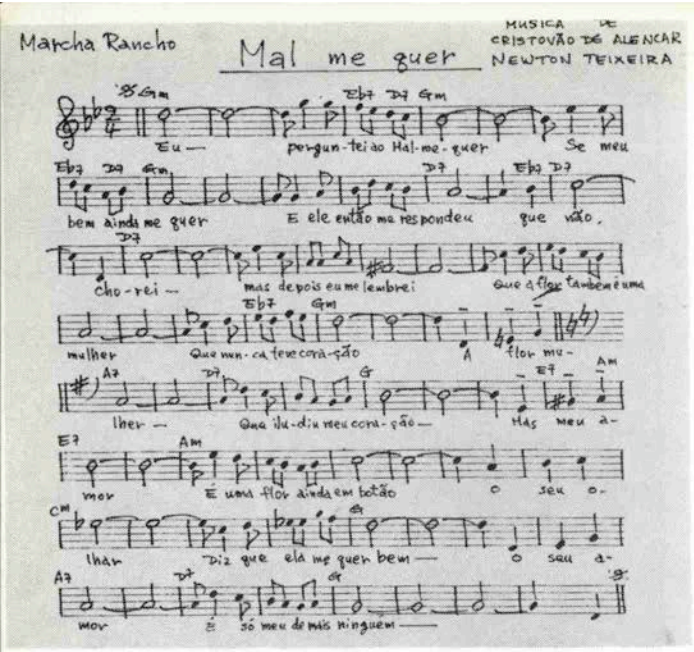
タキシー・ダンスと初めてのカルナヴァル

右近　雅夫〈在ブラジル・サンパウロ〉

それから二、三日経ち、再びベネーさんが誘いに来た。例によって街に散歩に行こうというのである。今度は家の近くのアウグスタ通りでトロリーバスに乗り、終点のレプブリカ広場でおりた。そこからぶらぶら大通りを歩いて行くと、ちょうど今のリオ・ブランコ街とイピランガ街との角に、ひときわ明るいネオンの点滅する「タキシー・ダンス」という看板が目についた。裏口から中に入るとオーケストラの控え室へ行った。ここでもベネーさんは顔が広く、マエストロのオズワルド・ミラーニやトロンボーンのレナトらを紹介してくれた。僕が日本でジャズのトランペットをやっていたんだと、ベネーさんが自分のことのように自慢たらしくいうので、オズワルド・ミラーニが次のステージは特別、スイングものばかりを選び僕に一緒にやろうということになった。ステージから下を見ると、ホールの周囲にずらりと椅子が並べてあり、白・褐色から黒にいたるあらゆる肌の女達が、ダンスの相手をすべく坐って待っている。未だ時間が早いので男の客はちらほらしか見かけないが、入口でチケットを買い、一曲踊る毎に相手の女にチケットを渡すようになっているらしい。曲はグレン・ミラーの「タキシード・ジャンクション」であった。僕が関学の軽音楽部に入った時、今は神戸でパブを経営されている、山本忠治先輩に初めて教わった曲である。

このようにして、ベネーさんは何度も家に誘いに来ては「街の散歩」に連れて行ってくれた。それは夜の音楽に限らず、昼間の仕事の紙屋のセールスにも連れて歩き、ブラジルでの商売のやり方を実地に教えてくれたので、後になって自分で同じ業種相手の商売をやるようになってから非常に役立った。

やがてカルナヴァルが近づくとベネーさんがやって来て、「カルナヴァルに良いアルバイトを見つけてやろう、ブラジルじゃカルナヴァルにトランペットを吹くと、とても良い収入になるから」といって、僕をプラサ・ダ・セ（セ広場）の中央寺院の前に連れて行った。その時初めて知ったのであるが、セ広場のカテドラルの前は、俗にポント・デ・ムージコと呼ばれ、夕方になると二、三流のバンドマン達の溜まり場となり、仕事を見つけて来たマエストロが、そこで必要な楽器のやり手をかき集め、仕事に行くようになっているらしい。少し離れたところで、一人のマエストロらしい男と何かひそひそ話をして居たベネーさんが手まねきしたので、側に行くと、彼は急ににこにこして、商談成立だといった。ただし、自分はサンパウロで仕事をすることになっているので一緒に行けないが、お前はサンビセンテのクラブで演奏することになったから、すぐ出発するようにといって、僕が不安そうな顔をしていると、横にいたトランペットのケースを抱えた州兵の制服を着た黒人を呼んで「シルヴィオが一緒に行くから心配しなくてもいい」といって長



距離バスの切符をくれた。僕は少々心細くなったが、今更断るわけにも行かず、シルヴィオと一緒にバスに揺られサンビセンテまで行った。入江に面したクラブにやっとたどり着くと、もうすぐマチネーが始まるので、先に来た連中がさかんに音を合わせているところだった。「ドン」と太鼓の合図と共に、短いファンファーレをトランペットが吹いた途端、入口の戸を開けたのであろう、色とりどりに仮装した子供達がどっとなだれ込んで来た。打楽器の強烈なリズムと、単調なメロディのくり返しのカルナヴァルの音楽に合せて、子供達はとんだりはねたりしながら、広いホールを手をつないでぐるぐる周り出した。

夕方にマチネーが終り、暫く休憩、夕食を済ませるといよいよカルナヴァルのバイレ（舞踏会）が始まった。オーケストラが演奏を始めると、仮装したり、Tシャツ姿の老若男女がぞろぞろ入って来て場内はみるみるうちに一杯になった。彼等は合唱しながら、手をつないで大きな輪になってぐるぐる廻ったり、ぴょんぴょんはねるようにして、各自勝手なことをして楽しんでいる。最近のブラジルのカルナヴァルは、婦人の肌の露出度が毎年大胆になり、トップレスや紐のように細いふんどしが大流行だが、あの当時はそうでもなかった。それより初めてのカルナヴァルでびっくりしたのは、十時にバイレが始まると同時に、「ドン」と打ち出した太鼓のリズムは明け方の四時にバイレが終るまで、延々六時間の間「ノンストップ」でその間オーケストラの方ももちろん吹きっぱなしである。これにはしまいに僕は参ってしまった。シルヴィオが、あらかじめ加減して吹くようにと注意してくれてはいたものの、カルナヴァルの四日間、こんな調子でトランペットを吹き続けると、僕の唇は充血し腫れ上り、疲労で目が自然に塞がりそうになり、意識がもうろうとして来て、もうカルナヴァルにラッパを吹くことなんて金輪際御免だと思った。悲しいかな、ブラジルに来て間もなくのことで、途中で一人でサンパウロへ逃げて帰るわけにも行かず、最後までがん張り続けた。

それはカルナヴァルも終りに近い四日目の午前三時頃であったろうか、最高調に熱した急テンポのサンバのリズムが突然ぴたりと止まった。短いアナウンスの後、ゆっくりしたテンポの「マル・ミ・ケール」という哀調を帯びた曲が始まり、突然ホールの入口のドアが一杯に開かれると、何十人からなる男達の団体が、皆同じピエロの姿に仮装してゆっくり踊りながら入って来た。やがてホールの中央に整然と並ぶと、彼等は低い声で合唱し出した。この曲は、古くから毎年カルナヴァルに愛唱されて来た曲で、「マルミケール」といえば、野菊の一種に属する花であるが、花びらの数が一定で無いので、若い恋人同士が花びらを一枚ちぎっては「ミ・ケール」(He wants me)、また一枚ちぎっては「マル・ミ・ケール」(He doesn't want me) といっては恋占いをする。毎年、カルナヴァルでこの曲を聞くたび、僕はピエロの乱舞する、あの夢のようなシーンを忘れる事が出来ない。

Family Christmas

ドイツ菓子
Fa.Heim's
ユーハイム®

当社はユーハイムコンフェクトとは関係ございません。混同されないようご注意ください。

本店	三宮生田神社前	TEL (331) 1694
三宮店	三宮大丸前	TEL (331) 2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL (391) 3539
西ドイツ本店	フランクフルトゲーテハウス内	TEL (0611) 280262
西ドイツ2号店	フランクフルト、テアーター・プラッツ2	TEL (0611) 252856

こうべにふれあいのディテールを

心の通う店創り

nick
KOBE NAGOYA TOKYO

神戸日建

商業施設全般・調査企画・店舗装備・設計施工

株式会社 神戸日建

本社(設計室)	神戸市中央区御幸通3丁目2ー20 PHONE (078) 252ー1321(代)
神戸事業部	PHONE (078) 251ー3525(代)
名古屋事業部	PHONE (052) 561ー3618
東京事業部	PHONE (03) 278ー1369

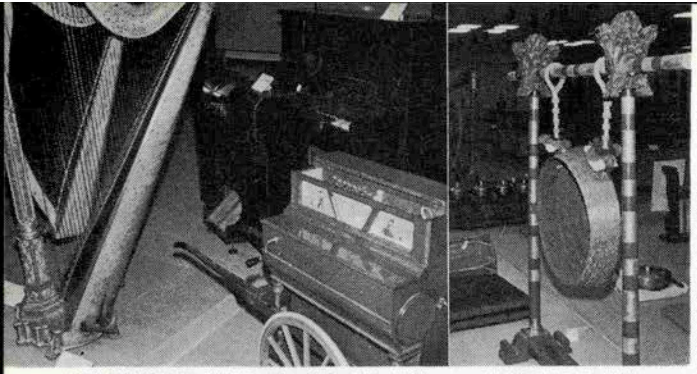
●ローン・リースの開店資金のご相談を承ります。

地域文化論

〈その16〉大阪音楽大学附属楽器博物館

小石　忠男（音楽評論家）

クルト・ザックスによると音楽は原始的な状態のなかで歌うことからはじまったというが、旧石器時代には既に声だけではなく、石でつくったガラガラのような楽器が使われていたらしい。つまり人類の文化の発展は楽器の発展が象徴するといってよいのだが、そうしたことを知るには、楽器博物館を一度は見なければならない。楽器は絵や写真ではわからないことが多く、実物を目前にすることが理解の第一歩となる。もちろん研究者のために実物見本が必要なことはいうまでもない。



（左）バリのエラール製ハープ、（右）スペイン製バレルピアノ、（後ろ）ドイツ製フィノーラ

バリ島のガムラン楽器、クンプル

そこで「地域社会と密着し、開かれた大学」の理念を提唱された大阪音楽大学の前学長、故水川清一氏は、学内に楽器博物館を設置することを考えられた。おそらくかなり以前のことであろうが、一九六七年、その計画は楽器資料室としてまず一歩を踏み出し、翌年はやくも楽器博物館に発展した。さらに一九七四年には独立した建物のなかに収容されたが、それ以来、展示品も増えつづけ、最近、竣工した水川記念館（大阪音楽大学K号館）に移転、さらに規模を拡大して、この十月十五日から一般公開されることとなった。

この水川記念館は阪急宝塚線の庄内駅から徒歩二十五分、あるいは北大阪急行江坂駅前から出ている庄本行バスの上津島下車徒歩三分の地点にある。大阪空港へ行く高速道路のすぐ横である。長辺が百メートルという広大な五階の建物だが、ここには各種の教室のほか録音室、オペラスタジオ、音楽音響研究室、音楽生理研究室、音楽文化研究所など大学の研究機関があつめられている。楽器博物館はその四階にあるが、大学の休みの期間を除いて、月水金曜日に午前十時～十二時、午後一時～四時の時間帯で一般に公開（入場無料）されている。大学としてはここを民族音楽学、比較音楽学、音楽史、楽器学などの教育と研究に使うわけだが、音楽に興味のある人なら、だれが見ても楽しい。こうした楽器博物館は他に例がないわけではないが、関西ではこれが唯一のものであろう。展示品や展示方法にも独自の特色がある。現在、邦楽器三二九点、アジア地域民族楽器三五〇点、ヨーロッパほかの楽器三〇二点、計九八一点の資料を展示しているが、アジア、日本の楽器がよく揃っており、バリ島のガムラン楽器群は展示場所で合奏することも可能である。また各種の楽器が原産地や地域別でなく、楽器としての分類別に展示されているのが大きな特色といえる。つまり弦をはじく楽器なら、洋の東西を問わず同一種として並べられており、見る人は自然に比較音楽学的興味をもつことになろう。

わが国ではほかに武蔵野音大に楽器博物館があり、外国にもいくつかの例があるが、東洋の楽器を含めてこうした展示方法をとっているのは大阪音楽大学だけだと思う。交通に関してはやや不便だが、ここを拠点としてユニークな研究の行われることを期待してよい。

とにかく貴重な博物館である。

★キャンペーン
国際文化都市神戸を考える

〝白い町〟神戸をさらに美しくしよう

嶋田　勝次〈神戸大学工学部助教授〉
松井　政和〈ラジオ関西専務〉
菊水　啓輔〈菊水総本店社長〉
宮本　豊子〈兵庫県生活文化部生活課主査〉
菊地　吉弘〈株式会社ペアーズ代表取締役〉

これまではロケーションのよさに甘えすぎていた

――今回は、神戸をより美しく、より住みやすい町にするためには、というテーマでお願いいたします。

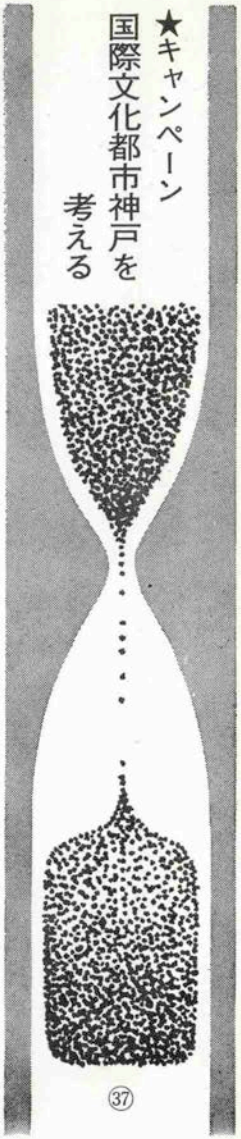
嶋田　神戸市の方と我々とで神戸市をどう美しくするかという景観の問題を考えて来たのですが、まず、都市景観の分類を考えてみますと、一つは眺望型景観。遠くから見て美しいか美しくないかという問題。もう一つは、身近かな景観、これを環境型景観といっていますが、この二つを対峙させると、眺望型景観はモノとしてなかなかつくりにくい。すぐにはできない。そこで環境型景観を考えてみたいと思います。

そのなかで、一つはスペースといいますか、空間をどうつくって行くか、という問題。もう一つは緑の問題。これが大きなファクターになる。さらにもう一つはモノづくりをどうして行くか。モノとして環境型景観のなかで一番大切なのは建物ですね。美しい建物をつくって行くべきではないか、とか、道の舗装をどうするか、とか、それぞれについての色だとか材料だとか、そういうものについても考えて行くべきではないか、ということで考え始めたわけです。

また、文化財としても考えて行くべきではないか、という考えも出て来た。北野の異人館のあたりを町並みとして残して行くという方針で、伝統的建造物保存地区として異人館を含めて伝統的な町を残して行くことが、地元の方々の協力も得られて何とか定着して来ました。

これからは新しい町づくりの問題と古い町並みの問題の両方をどういうふうにセットして行くかが、神戸の大きな課題だろうと思います。

松井　一言で神戸の町の印象を申しますと、相当いいと



㊲

いうか、美しい町だと思います。今、眺望型と環境型といわれましたが、眺望型という意味では立地条件は実に素晴しいし、基本条件の上の積み重ねの美しさがある。

このあとの問題は、美しさを文化的にどう調整して行くかになるだろうと思います。そのためには役所だけで

菊地　吉弘さん

宮本　豊子さん

菊水　啓輔さん

松井　政和さん

嶋田　勝次さん

はなくて、住んでいる人たちがお互いにチェックして行くことが一番大事でしょう。

神戸はよく〝白い町〟といわれますが、すべての条件の基礎になる白い色をもった町だと思っています。

菊水　神戸は自然のロケーションとしては素晴しいところだという印象はありますね。

住民がその町にいかに愛着をもって長く住みたいかということを調べてみると、京都と神戸が一番強かったらしいですが、神戸と京都とではその意味が全然違う。京都は、加茂川の水が逆さに流れても私は京都が好きなんだ、という愛着。神戸は、モノは安いし、景色はいいし、綺麗だし、とにかく住みやすいから神戸はいいんだということで、環境が悪くなったらよその町へ行くという結果が出ていました。逆にいうと神戸には変なイズムがないから町をなおして行くのも、うまくまとめて行けばいろんなことがやりやすいのではないかということです。

宮本　神戸ほどいろんな意味で調和のとれた町は少ないと思います。特に山がある町で、しかも、近代的な感覚のある町ということでは神戸だけでしょうね。とにかく自然の条件は恵まれています。

ところが残念なのは、山の麓まで開発されすぎてしまった。もう少し自然を大事にして行かないと神戸の住みやすい景観がなくなって来ると思います。

それと人の量の問題。人口密度が一瞬でも高くなると景観を損ねる思わぬ条件が出て来るのではないか。そういう意味で立体的な空間を含めて考えて行かなければならないと思っています。

菊地　確かに神戸の町は眺望的に見た場合、綺麗な町、心の和らぐ素晴しい町だと思いますが、ただ、いわゆる町なかに関して見ると、決して綺麗だとは思わない。

神戸の町が綺麗だというのは、山があって海があってというロケーションがいいのであって、実際に町なかを見たら果してこれで綺麗のかなという感じがあります。

というのは、これは神戸だけではないのですが、建築

様式が統一されてないということが一番の原因ですね。たとえば、ヨーロッパの町並みを見ますと、素材とか建物の高さもある程度制限されている。もちろん何百年もかかって築かれた町なので素晴しいのですが、日本の場合でしたら江戸時代の町並みは美しかったのではないかと思いますね。京都など日本の歴史の古い町に行きますと、そういう名残りがあって綺麗だと思う。そこに建っている建築様式がほぼ統一されているというか、似通っているものが多いですからね。

特に町なかでも美しさを感じさせるために、三宮界隈を歩いていても目を上げたら山が見えるような、そういう空間が欲しいですね。また、坂を上がって山手の方へ行くと海が見えるような、そういう町を神戸に期待しているのですが。行政にももっと考えていただきたいですね。

菊水　ロケーションに惑わされて綺麗だな、と思うけれど、確かに町なかについては頑張らないといけませんね。

嶋田　やはり神戸の地勢のロケーションに甘えている。今まで市街地のなかに公園や緑が少なかったのは、六甲山や海に甘えていた。それが大きかったと思いますね。

ホッと一息つける空間が必要だ

松井　ロケーションに甘えていたところはあるかも分りませんね。しかし、部分的には綺麗になったところは相当あると思う。北野の異人館のあたりも若い方々が積極的に言い出されたから綺麗になったと思う。みんなが足下を見直した。

日本は、ヨーロッパのように石の建築ではなく、瓦と土と泥の建物のなかへ突如、ビルをやたらと建て始めたわけでしょう。神戸はロケーションがいいがために、民家とビルが混っても割と景観としては点数がいいと思っているのですが、部分的に汚ないところやまずいところはいっぱいある。これをどうするかについては役所だけに任せておく時代ではないという感じがしますね。

宮本　神戸は住んでいる人間の気質とロケーションがマッチしていて、京都にないモダンさがあり、ビルディングもうまく似合っていますね。ただ、センター街がビル化されたことは残念ですね。

嶋田　あれはビルが大きすぎましたね。こじんまりとまとまったものがいくつか並んで行くのが神戸に似合う。

菊地　やはり神戸の環境に合った、人間の手の届く規模のものをつくるべきだと思いますね。

本当に神戸の町が綺麗だったのは三十年も前だと思いますが、せんだって小泉八雲の古い文献が見つかって新聞に載っていましたね。神戸に関しては、ここは異国だが、これほど綺麗な町はないと書き残している。外国人がほめているので、相当美しい町だったと思う。ということは、建物が統一されていたと思うんです。これからの神戸の町、特に建物はこうあるべきだ、とかこう建てて行かなければいけないとか、そういうことを行政的に立法化するとかしないと本当に美しい町は生まれないと思います。

松井　均整をとるというところがなかったわけですね。とにかく一時はどんどんビルを建てようということで、ロケーションを忘れていた。経済の歴史と文明の歴史がうまく行けばよかったのですがね。今、文化の時代とかいわれ、お互いが自分の足下を見るようになって来ていますね。そして、それぞれが未来像を、さらにいえば、一つの美学みたいなものをお互いがもち始めた。そのときに気がついてみると、壁のような大きなビルが出来ていたという矛盾が出て来ている。

チェックし、調整し、この町をよくして行こうという美学をみんながもっているのだから、それぞれ意見を出し、行政に反映させて行くべきですね。

宮本　つくられた空間と自然にある空間は自ずと違いますね。自然をつぶしておいて、改めて人間がつくる空間は不自然なんですね。

神戸の町のなかで一番好きなのは、阪急沿線では大阪から神戸へ向う途中の、西灘駅の高架から王子動物園の

あたりですね。見ていると、朝日がさんさんと降りそそぎすごく綺麗です。西灘駅を下りて、川沿いに福住小学校のあたりへ行くと、ホッとしますね。素晴しい景観です。フラワーロードにしても綺麗ことは綺麗なんですが、人工の美しさだと思う。その点、川に柳がたれて、しかも、山が見えるというあの景観は素晴しいですね。ホッとする。

菊地　町が綺麗でも、そこで生活している人が絵になるようでなくてはいけないですね。絵になるような町ということは、市民が参加している町ですね。

菊水　その空間で豊かな市民生活が自然に営まれているということですね。そこに生活があって、機能があって調和がとれていないといけない。

嶋田　生活の匂いと美しさが一緒にないといけない。

菊水　何となく異人館的神戸をつくるといいというような錯覚があるようですが、そうではないですね。

松井　神戸即異人館ということになっていますが、異人館は部分だという認識に立たないといけないですね。

　ただ、そういう部分と、そうでないところの接点を大事にしないといけない。ある点からガラッと環境が変わるというのではなくスムースに入れる導入部をうまくやるべきですね。導入部の空間がうまく出来ればいい。

　たとえば、センター街の東口は貴重な広場にすべきだと思いますね。そこを通って商店街に入る。

宮本　どうせ人工の広場しか求められないのですが、上手につくる必要がありますね。

嶋田　日本は道の文化で、西洋は広場の文化だと思いますが、広場のつくり方は特に下手ですね。

宮本　情緒的空間が欲しいですね。

菊地　ただ、だだっ広いだけの空間だとベンチにしても座りにくいですね。そういう心理学的考察も建築するときにとり入れて欲しいですね。

松井　ポートピア'81のときには国鉄三ノ宮駅前のビルが出来ますね。いろんな計画が出来ているようですが、あそこが一番大事じゃないですか。現実にたくさんの人が乗降し、たむろし、集合する。相当綺麗で便利なようにすることが必要ですね。あそこが〝顔〟だと思います。

ポートピア'81までに標識を整備しよう

嶋田　話は変わりますが、他所の人が神戸へ来たときにいつも言われるのは、神戸は分りにくいということです。僕らの感覚では、山があって海があって分りやすいと思うのですが、他所から来た人には分りにくい。新神戸駅を下りてどっちへ行ったらいいか分らない。三ノ宮駅を下りても分らない。センター街がどこや分らない。分りやすい標識をまずつくらないといけないですね。

松井　僕もそう思いますね。東京からのお客さまなどでも分りにくいと言いますね。山が北、海が南ということは感覚的に分っているのですが、東西が分りにくい。

菊水　そういう意味で、単純かも分りませんが、路面タイルの色を変えて行って観光ルートをつくるとか、これは外国にも例がありますが、それとか、区ごとに路面タイルの角の色を変えるとか、そういう分りやすいことがいろいろと考えられると思うのですが。特に観光ルートなら赤い色の上を歩いて行くと新神戸から異人館まで歩いて行けるとか、全部ではなくても五つに一つはそういう色タイルを使うとか、分りやすい目印ならつくろうと思ったらつくれるのではないかと思いますね。

松井　赤い色を追いかければポートピアの会場まで行けるとかね。それぐらいの親切はやるべきですね。

　それと、特にポートピアでは神戸へ初めて来られる人が多いので、モダンな大きな分りやすい看板をあげておく必要があると思いますね。

宮本　ニューヨークの数字の表示でも数字さえ読めれば分るわけですね。分りやすいことが重要です。

菊水　たとえば、各区でシンボルマークをつくる。ヨーロッパでは町に必ずありますね。ベルリンが熊、パリが帆掛け船とか、あるんですよ。だから、生田区は熊とか、

葺合区は猫だとか、そういうマークがバスの停留所に貼ってあるとか、そういう発想がこれから必要でしょうね。

宮本　それとバスの路線図を乗る身になって分りやすく工夫できないものでしょうか。

菊水　これからの話ということでは、中突堤とメリケン波止場の間を埋めようという説明をちょっと聞いたのですが、ああいうところは非常に大事な場所だと思いますね。ただ、市側の話を聞いていると、公園にするということで緑にする意識はあるのですが、もっと海を意識したことを考えて欲しいなあと思いましたね。たとえば、シーフーズレストランをもって来るとかですね。

宮本　海岸通りをもうちょっと綺麗に出来ないものでしょうか。今はすごくダーティという感じでしょう。海岸通りというのは、名前としてはすごくいいんですが、もう少しロマンティックな道にして欲しいですね。

松井　そういう意味では、人間らしい海のほとりの通りということでは神戸は遅れていますね。横浜では山下公園のあたりがありますから綺麗ですが。

嶋田　中突堤の話にしても、もう一度、神戸の発祥の地を見直そうじゃないか、そこへ人を集めて来よう、今のダーティな海岸通りを人間的なものにしようというのがそもそもの発想のもとだったんです。

宮本　海岸通りには、違う意味の神戸をものすごく感じるんです。あそこを大事にして欲しいですね。

嶋田　異人館の様式だけが神戸じゃないわけです。百何十年という期間だけですが、いろんな様式がいっぱいある。それを大事にしながら新しいものをどうつくって行くか、過去の様式につないで行きたいと考えています。もう一つは、北野町に対して灘の酒倉を別の観点から大事にするべきではないかと思います。そして、神戸は横浜とよく対比されるのですが、横浜と違った神戸の町は、〝白い町〟ではないか。神戸にはレンガ色の建物が多すぎます。神戸はレンガじゃない。御影石を使った本物の石の町にしたいと思います。

松井　要するに神戸は基本になるロケーションは百パーセントで、神戸に住んでいる人はこの町が好きで、モダンでシャレた感覚がある。これからは、市民が自分の町だという意識で、部分部分を直して行く。そして全体とのバランスを考えて行くという役割を担うべきですね。それから一つの特徴ある地帯と住民の地帯との接点を大事にして行く。そういうことを思うわけです。

菊水　神戸というと異人館とレンガだという考え方ではなくて、それ以外に何かあるのやないかと考えて行かないといけないですね。それと基本的に町は清潔で綺麗でなければいけない。これを市民運動としたい。町は自分たちで綺麗にしようという感覚が基礎にないといけないですね。また、海が見え山が見える美しい町だから、商店街がどこもアーケードをつけられるのは残念ですね。

宮本　表通りは画一化されてしまって、これはもう仕方がないのですが、裏通りというか、一筋入った通りにある昔からの文化を大事にしたいですね。一筋入ると、表通りで味わえない部分を残して欲しいですね。それと神戸へ来ないと味わえないものを何か創造して行かないといけないですね。また、もう一つは、道路だけが先行するものでも、町だけがあるものでもない。そこに人との調和が必要です。そこには生活がないといけない。経済優先ではなく人間優先で、しかも、外から来られる人をうまくお客さまとして迎えられる町づくりをして欲しいですね。そして、土の道を残して欲しい。

菊地　神戸はこれから、観光地となって行くと思いますが外から来られた方が失望しない町にしたい。そのためには神戸の財産である山と海を大事にして欲しい。それと昔からあるいいものをもう一度見つめ直して大切に育てて行って欲しいですね。そして、一人ひとりが町を美しくする気持ちになることが何より大切だと思います。

神戸は明るい町ですから、これからは光を反射するような素材を使った建物をつくって欲しいですね。

（ブラン　ドゥ　ブランにて）

田崎真珠㈱
取締役社長　田崎俊作
神戸市中央区旗塚通6－3－10
ＴＥＬ（078）231－3321

オールスタイル㈱
取締役社長　川上　勉
神戸市中央区伊藤町121
ＴＥＬ（078）321－2111

カネボウベルエイシー㈱
取締役社長　稲岡必三
神戸市中央区三宮町1丁目9－1－807
センタープラザ東館8Ｆ
ＴＥＬ（078）392－2101

㈱ベニヤ
取締役社長　松谷富士男
神戸市中央区三宮町1丁目10－1
ＴＥＬ（078）332－3155

モロゾフ㈱
取締役社長　葛野友太郎
神戸市東灘区御影本町6丁目11番19号
ＴＥＬ（078）851－1594

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上５社の提供によるものです。

PORTOPIA'81

神戸への旅。未来への旅。

いにしえの歌人が愛した六甲。異国情緒ただよう北野。世界のファッションや味が集う三ノ宮あたり。いまここでは、世界に先がけ未来が始まっている。

21世紀からのメッセージ。

ダブルデッキのアーチをくぐると、そこは21世紀だった。ここポートアイランドでは未来の海上都市づくりが始まっている。これを記念して開催される、ポートピア'81。ご覧になりませんか。

夢を、夢で　おわらせない。

海上未来都市で開催される大博覧会

ポートピア'81

会期：昭和56年3月20日→9月15日

主催●(財)神戸ポートアイランド博覧会協会 〒650 神戸市中央区三ノ宮町2丁目11-1
センタープラザ西館6F ☎(078)302-1981(代)

無人運転の電車が未来都市を象徴。

パビリオンの数は、約30館。21世紀への新しい提案が、国内外から出展されます。未来エネルギーをはじめ異次元空間や、宇宙擬似体験など催しも多彩に展開。楽しめることうけあいです。

第2次前売券発売中。

ただ今、第2次割引前売券好評発売中。昭和56年1月31日まで。プレイガイドなどでどうぞ。